

福島の旅 2024



2024年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

秋の福島県を旅友たちと4泊5日で巡ってきた。この旅友たちは酒と旅をこよなく愛する連中なので「ふくしま酒遊隊」と名付けたが、今回は酒だけでなく宿にこだわった旅を体験すべく、様々なタイプの宿に泊まってきた。

第一章 浜通り

■ スパリゾートハワイアンズ

福島県は大きく3つのエリアに分けられる。いわき市のある太平洋岸の地域を“浜通り”、東北新幹線や東北自動車道が走る福島市や郡山市のエリアを“中通り”、そして猪苗代湖や会津若松市のエリアを“会津”と呼んでいる。

今回の旅はその3つのエリアを全て巡るように計画し、まずは浜通りを訪れる。

浜通りの代表的な観光施設は「スパリゾートハワイアンズ」だろう。いや、これしかないと言っても過言ではない。

私はこの施設に過去数回訪れており、温泉とハワイアンショーを観ることはもちろんのこと、併設されているゴルフ場でゴルフも楽しんでいた。この施設のメリットは首都圏各地から無料送迎バスが毎日運行されていることだろう。(旅行記「ハワイリゾート1万円の旅」参照)

今回の旅のために結成した「ふくしま酒遊隊」のメンバーは私を含めて男女6人、全員が無料送迎バスに乗ってスパリゾートハワイアンズに到着する。その中で初めて訪れるのは3人で、彼らはこの施設の大きさに目を白黒させている。

スパリゾートハワイアンズはとにかく広い。フラダンスショーを行うステージや流れるプールのある温室、水着で入る混浴温泉、裸で入る男女別温泉、そして3つのホテルがある。

温泉のテーマパークでもあるので、浴槽の数は実に豊富だ。特に「江戸情話 与一」という露天風呂は屋根や柱が江戸時代風の和の装いをしており、夜になると影絵のショーが開かれる。

この施設ができたいきさつが面白い。それは単にテーマパークの開業ではなく、炭鉱という斜陽産業の事業転換という側面があった。

昭和 30 年代、炭鉱は不況に陥っていた。会社は炭鉱労働者やその家族を守るために炭鉱以外の新規事業を立ち上げることにした。幸いにしてこの炭鉱では石炭を掘ると、その 2 倍の温泉水が出る。これが厄介物扱いされていたが、この温泉水を利用するという逆転の発想でハワイを創ることにした。

新しい試みには賛否両論出たが、なんとか反対を押し切り苦勞の末に「常磐ハワイアンセンター（現スパリゾートハワイアンズ）」を 1966 年（昭和 41 年）にオープンさせた。この苦勞話は映画「フラガール」で上手く描かれている。

そんな話を酒遊隊メンバーに伝えたが、彼らは温泉と酒、フラダンスショーに夢中になっている。



【フラダンスショー】

■ ドアが開かない

翌日は無料送迎バスで帰らずに福島県内を巡るために、いわき市内でレンタカーを借りる。

6 人分の荷物を押し込んで出発すると、車内の警告音が鳴り始める。最初はシートベルトをしていないために鳴っているのだと思いシートベルトを確認するが、鳴りやまない。

調べていくと、リアゲートが半ドアだという警告音であることが判明する。車を停めて対処するが、外からリアゲートを開けようとしてもロックされていて開かない。男性陣 3 人が色々手を尽くすがどうにもならない。

どうやらリックサックのヒモがリアゲートのロック部分に挟み込んで半ドア状態を認識しているらしい。しかし実際にはロックされており、何故かロックは解除できない。

警告音が鳴り続けてうるさいのと、リアゲートが開けられないので荷物の出し入れができないから、仕方なくレンタカー会社に戻ることにした。

レンタカー会社に戻ると、受け付けの女性社員が対応してくれる。男性3人が手を尽くして開けなかったのが、こんな女性社員（失礼！偏見です）に直せるのかと思いつつ鍵を渡すと、30秒もしないうちにリアゲートが開けられ警告音も無くなった。

これには男性陣は驚いた。そして「一体、何をやってたの」という女性陣たちの軽蔑の眼差しを背中を感じつつ、旅は再スタートする。

■目の前で交通事故

トラブルによって約1時間の行程遅れが生じる。そんな心配をよそに午後2時を回った頃、車の前方に虹が現れて、車内では「2時に虹とは、偶然としても良いね」という声が聞こえてくる。

そして次の瞬間に私たちの車の前で衝突事故が発生する。

対向車の軽ワゴン車が反対側にあるガソリンスタンドに入ろうと、無理をして私たちの車の前を走る軽乗用車の前で、ハンドルを切った。それを前の軽乗用車はよけることもブレーキを踏むこともないまま軽ワゴン車の左横に追突した。「ガシャーン！」という音がして、軽ワゴン車は転倒して、前の軽乗用車も止まった。

それはまるでスローモーションでも見ているかのような事故シーンで、車内の6人全員が虹と一緒に事故の瞬間を目撃した。

私たちも車を停めて、事故の対応をする。転倒した軽ワゴン車の運転手を引きずり出そうとするが、運転席のドアは車の下になって開かない。助手席側のドアは変形しているのでこれも開かない。

リアゲートが無傷だったので、リアゲートを開けて運転手を救出することができた。幸いにもかすり傷程度で大きなケガはしていない。

奇しくも私たちの車のリアゲートが開かないトラブルで始まり、行程が遅れ、2時に虹を見て、衝突事故を見て、最後は事故車のリアゲートからの救出劇とは、誰がこのシナリオを書いたのだろうか。



【事故現場】

■原発廃炉資料館

交通事故現場を後にして、「東京電力原発廃炉資料館」にやって来る。

この施設は2011年3月11日の東日本大震災によって発生した福島第一原子力発電所の事故を検証し、安全対策、事故の原因と責任、廃炉作業の進捗などを説明している。

今回の旅で、私はここを重要な見学施設と位置づけており、行程に組み込んだ。浜通りはもともと福島県でも観光名所が少ない場所なのに原子力発電所の事故でさらに活気がなくなっている。

展示では、事故の責任は全ての外部電源喪失した場合を想定していなかったとして、東京電力の過信にあったと結論付けている。

しかしながら再稼働しようとしている東京電力の柏崎刈羽原子力発電所などのことは何も触れていない。素人感覚で申し訳ないが、もしも柏崎刈羽原子力発電所でも全ての外部電源を喪失したら原子炉を安定停止させる術があるとは到底思えない。

酒遊隊の男性陣は原因追及が甘いと言い、女性陣はよくやっていると言っている。

この事故の影響で福島県内には今も居住できない帰還困難区域が大熊町や双葉町など7市町村にある。

常磐自動車道でこの地域を走行すると放射線量の表示器があり、車内には緊張感が走る。

一般の人が1年間で浴びる放射線量の限度は1 mSv（ミリシーベルト）と法律で定められている。道路の表示は毎時0.2 μ Svで、1年間浴び続けると1750 μ Sv=1.75 mSvなので、法律の規制値を超えてしまう。だから住めないのだろう。



【放射線量計】

第二章 中通り

■高湯温泉

中通りの高湯温泉にやって来る。高湯温泉は福島市の山間部にあり、福島市から裏磐梯に抜ける磐梯吾妻スカイラインの入口に位置しており、溪流沿いに雰囲気のある小綺麗な旅館が数軒並んでいる。

山形の蔵王温泉、白布温泉とともに「奥州三高湯」と呼ばれている名湯で、「2024年じゃらん全国温泉地ランキング総合満足度1位」に輝いた。

私は厳冬期に行う恒例の猪苗代湖畔の極寒キャンプの後にこの温泉地を訪れているが、他のメンバーたちは初めてでこの温泉を楽しみにしてきたようだ。

■ 玉子湯

今宵は高湯温泉の一番手前にある旅館「玉子湯」に泊まる。人気の宿なので、最近はこの宿に泊まることを目的にしたツアーも組まれており、今回の旅で最も予約が取りにくかった。

源泉が湧き出ている場所の傍に風情ある温泉小屋がある。この小屋に入って入浴するのだが、この温泉小屋の外観も内部もたまたまなく良い雰囲気を出している。



【玉子湯源泉と温泉小屋】

泉質は硫黄泉で、玉子が腐ったような匂いという表現がぴったりの源泉が湧き出ている。

それゆえ玉子湯という名前になったかは定かではないが、温泉に浸かると肌が茹で玉子の表面のように滑らかになると、宿のHPでは紹介している。



【温泉小屋の中】

当然のように夕食は素晴らしいの一言に尽きる。料理は一品ずつ出されるので、一堂に会して写真に収めることができないのが残念だ。それでも品書きを載せておこう。

甘味	香の物	止め碗	御食事	蒸物	炊合せ	焼物	台の物	御作り	前菜	箸初め	おしながき
マロンプリン	御新香二点盛り	きのことみれ 湯葉 柚子	会津こしひかり 子持ち木耳	茶碗蒸し 軍鶏つくね 紅葉麩 蟹身	椎茸信田巻き 木の葉南瓜 茄子 青味	白身魚黄金焼 きのこソテー	福島牛芋煮鍋	南鯖 勘八 妻一式 甘海老	茸と菊花のポン酢和え 秋刀魚袖庵 九十寄せ 合鴨煉製 海老菊花	柿豆腐 美味出汁 くこの実	

【夕食の品書き】

夜の温泉小屋もまた風情がある。暗闇に包まれる中、灯籠の灯りがとても良い。残念なのは温泉小屋内部の蛍光灯色の灯りで、ここは暖かい電球色を使ってほしい。



【夜の温泉小屋】



【玉子湯の朝食 左が温泉小屋を模した蒸籠】

朝食も豪華で、こちらはまとめて出されたので写真に収める。

固形燃料で温めるのは、あの温泉小屋を模した蒸籠（せいろ）で、温泉小屋へのこだわりが感じられる。

蒸籠の中には豚肉と野菜が入っていて、朝から蒸し焼きの肉と温野菜をいただく。

■磐梯吾妻スカイライン

翌日、玉子湯を出てすぐに磐梯吾妻スカイラインに入る。

紅葉真っ盛りのはずだが、残念ながら本日は雨で山は霧に包まれて紅葉を楽しむことはできない。それでも霧が晴れた一瞬を逃さずに何とか紅葉を撮影する。



【磐梯吾妻スカイラインの紅葉】

浄土平の有料駐車場に車を停めて、紅葉散策をするのがこの地域の紅葉観光の定番らしいが、その有料駐車場は本日ガラガラになっている。玉子湯のフロントのおじさんの話ではこの前の土日は駐車場に入るために3.5kmも車が並んだという。

標高1547mの浄土平から標高1707mの吾妻小富士へ登る登山道がある。

簡単に登れるので、私は昔に登った記憶がある。それは50年くらい前のことだ。

その反対側の一切経山（いっさいきょうざん）は標高 1947m もあって、ちょっとした登山になる。そこから見る「五色沼」は、別名“魔女の瞳”という沼で実に素晴らしいという。

私は一切経山には登った経験がないので登山を楽しみにしていたが、この天候なので断念する。

第三章 会津

■もうひとつの五色沼

磐梯吾妻スカイラインを抜けて会津磐梯山の北側の裏磐梯にやってくる。

1888年（明治21年）に会津磐梯山の大噴火があった。山体崩壊によって北側の集落が埋没し、桧原湖、小野川湖、秋元湖などが生まれ、裏磐梯高原ができた。

その中でも有名なのが「五色沼」で、裏磐梯の観光名所になっている。

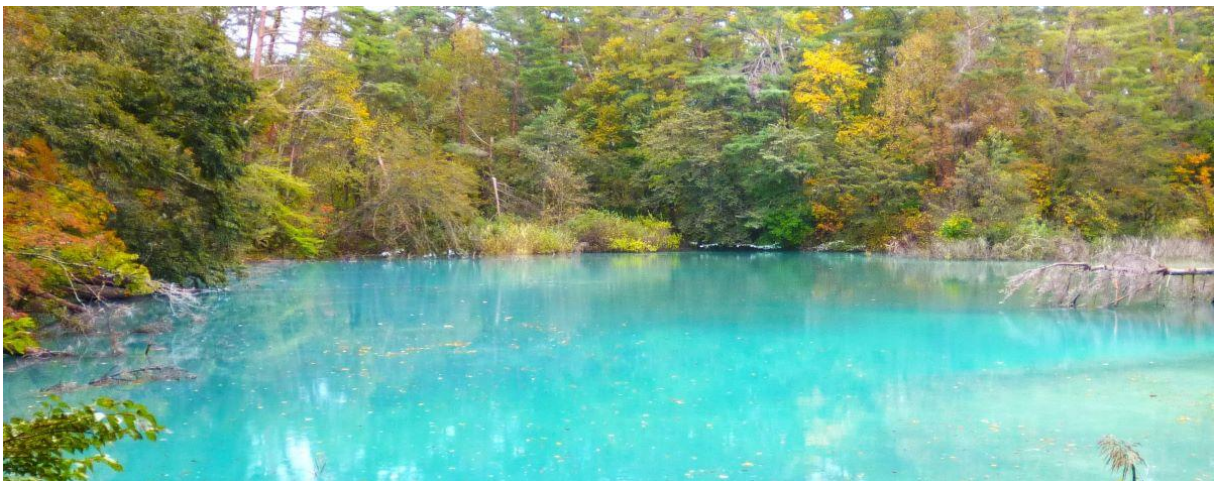
一切経山からも五色沼が見えると書いたが、実はその五色沼と全くの別モノになる。裏磐梯の五色沼の正式名称は「五色沼湖沼群（ごしきぬまこしょうぐん）」で、大小 30 余りの色の異なる沼の集まりに対して、一切経山から見える五色沼は 1 つの沼が季節や時間で 5 色に変化する。

雨も上がって、五色沼の遊歩道を散歩しようとするすると遊歩道入口に「熊、注意」の看板が出ている。

熊のことを聞こうと裏磐梯観光協会の中に入ると、先客がいて「熊はいつ出ますか？」と聞いている。観光協会の人「熊に聞いてみないと・・・」と煮え切れない。それでも先客は「何時頃に出やすいですか？」と聞き直すと、「朝夕が多いようです」と答えている。

私たちはそれを聞き、少し安心して遊歩道に向かう。時刻は 11 時 30 分になっている。

遊歩道を散策すると、青色を中心に各沼で違う色の湖を見ることができ、酒遊隊メンバーたちは満足そうだ。



【五色沼湖沼群の青沼】

幸いにも熊には遭遇せずに済んだ。調べてみると、熊は朝夕に出没することが多いという。この情報はとても有益で、「今後の旅に使える」と酒遊隊メンバーたちは喜んでいる。

■コテージに泊まる

裏磐梯は 1888 年の噴火によってできたので古い温泉地はなく、お洒落なリゾートホテルやペンションが点在している。そのため今回私はちょっと洒落たコテージを予約した。

登山が無くなったので、電話で到着時間が早まることをコテージに連絡すると、電話口から「こちらのミスで、お客さんが予約した 5LDK のコテージは他のお客が使うことになってしまい、3LDK のロフト付きコテージ 2 棟に変更してもらいませんか？」と言っている。

私は「とにかく部屋を見せて下さい」と言って、予定よりも早く着くことを告げる。

実はコテージを予約した時に、宿主から自宅が火事で全焼して予約ノートも燃えてしまったことを聞いた。そのためしばらくは新規予約を受け付けないということだったが、「3 か月先の平日なら大丈夫でしょう」ということで予約した経緯があり、ダブルブッキングしたようだ。

コテージに着いて、3LDK のコテージを見せてもらう。

部屋は、3 ベッドの洋室、6 畳と 10 畳の和室、薪ストーブのある LDK は 16 畳ほどある。対面キッチンにカウンターがあり、リビングには掘ごたつタイプの大きなテーブルがある。2 階のロフトは畳が敷かれ 12 畳ほどの和室になっている。トイレも 2 つ、風呂は 3 人同時に入ることができそうだ。冷蔵庫、電子レンジ、カセットコンロ、調理道具、食器類もそろっている。

最大定員は 12 名、とても使い勝手の良さそうな部屋で、築 10 年というから適度に新しく、メンテナンス状態も良い。

誰がこのコテージに文句をつけるのか、全員一致で借りることに賛成する。



【泊まった 3LDK のコテージ】

もちろんこの1棟のみで充分だが、ついでにもう一つの3LDKも見せてもらう。間取りは異なるが、機能はほぼ同じで、大きなダイニングテーブルをくり抜いてシンクが付けられている。

■お好み焼きが松茸ご飯に化けた

少し早めの夕食は私が焼く大阪風お好み焼きになる。

実は、私は定年退職をした時に今の仕事以外にいくつかの候補があった。その中にお好み焼き屋というのもあった。私はお好み焼きを焼き始めて40年にもなり、手伝いに訪れていた伊豆大島のペンションでは私のお好み焼きで島民との語り合いが10年近く続いた。

皆でお好み焼きを食べていた時にドアチャイムが鳴り、宿主のおばさんが「部屋が代わったお詫びの印に、松茸ご飯を炊くので食べるか？」と聞いてくる。

私たちは一瞬顔を見合わせたが、誰かが「遠慮なく頂きます」と言うと、皆で「ありがとうございます」と声を合わせる。

私は急遽、お好み焼きの枚数を追加して、宿主のところに女性陣に持って行ってもらう。女性陣は「大阪からプロのお好み焼き職人が来ていますから」などと言いながら渡したらしい。

しばらくして宿主のおばさんが、松茸ご飯を炊飯器ごと持ってきた。松茸がたくさん入っており、いい香りが漂っている。おそらく近くで採れたものだろう。

彼女は「お好み焼きは子供たちが喜んで食べて、こんなに美味しいお好み焼きは生まれて初めて」と嬉しいことを言ってくれる。

私たちもまさか松茸ご飯が食べられるとは、思わなかった。しかしながらお好み焼きで腹は膨れており、半分は朝食に持ち越される。



【松茸ご飯】

■喜多方ラーメン

翌日、せっかく会津にきたので喜多方ラーメンを食べようということになる。喜多方ラーメンは日本三大ラーメンの一つに数えられており、最近人気がある。ちなみにあとの2つは全国的人気の札幌ラーメン、博多ラーメンになる。

喜多方で一番人気の坂内食堂に行こうとするが、スマホで調べると本日は定休日になっている。そうすると二番人気、三番人気は混むので、あまりネットに出てこないラーメン屋「喜一」を選んでやって来る。

この店は朝の9時から営業しており、私たちが来店したのは10時30分だということのに、既に10組くらいが待っている。この状況に皆は「喜多方ラーメンはこんなに凄いの!？」と驚いている。

待つこと1時間、ようやく入店する。

喜多方ラーメンは醤油味が定番だが、この店の塩ラーメンがいくつかの賞を受賞しているので、私は塩ラーメンを注文する。

出てきたラーメンは出汁が良くきいたスープに、ちぢれた太麺がよく絡み抜群に美味い。特にチャーシューは柔らかく絶品だ。

酒遊隊のメンバーたちも満足そうに食べている。あれだけ待ったので特に美味しいのだろう。



【喜一の塩ラーメン】

■ さざえ堂

会津若松市の飯森山にやって来る。飯森山は白虎隊で有名だが、そこには「さざえ堂」と呼ばれるお堂が建っている。

白虎隊で有名になってからさざえ堂が建ったと思う人もいるかもしれないが、実はその逆で、さざえ堂は江戸時代中期に建立された。それから約100年後の幕末の戊辰戦争で会津若松城内から火の手が上がるのを飯森山から見た白虎隊19名の少年剣士たちが自刃（じじん）した。おそらく自刃する前にさざえ堂を参拝したはずだ。

このお堂はさざえのようにくるくる回りながら上に登るのでそんな名前がついているが、上りと下りが違うルートを使うという珍しい構造になっている。

私は高校2年生の夏休みにこのさざえ堂を訪れており、実に50年ぶりになる。



【さざえ堂】

■大内宿

江戸時代には会津と日光を結ぶ街道があって、南会津に「大内宿」という宿場街があった。現在も江戸時代の面影そのままに茅葺屋根の家が建ち並んでいる。

今では、南会津エリアの重要な観光名所になっており、日帰りの観光客で賑わっている。

この景観を引き継ぐために住民は土産物店や民宿を営んで生活している。国選定重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、この宿場の景観を未来の子供たちに引き継いでいくために、住民憲章「売らない、貸さない、壊さない」の3原則ができたという。



【大内宿 高台から撮影】

■本家 扇屋

日帰りの観光客が多い理由は、宿場街なのに民宿が2軒しかないからだ。

今回はそのうちの「本家 扇屋」に泊まる。この宿は、「蔵に泊まれる民宿、囲炉裏を囲んで名物女将の話が聞ける」という触れ込みで有名だ。

私たちは蔵の2階の部屋に通される。部屋の中では蔵という気がしなかったが、外から見ると確かに白い蔵になっている。

1階には別の宿泊客がいて、その声が筒抜けで聞こえるから、蔵の厚い外壁に反響している。



【本家 扇屋】

夕食は囲炉裏のある部屋で食べる。もちろん囲炉裏には火が入っている。

料理は田舎料理だが、手が込んでいる。揚げ物が全くなく、福島名物の馬刺し、そして岩魚、山菜などの地のものを上手に使っている。

女性陣は「豪華なのにとってもヘルシー！これは凄い」と絶賛の声をあげている。味はもちろん美味しい。



【本家 扇屋の夕食】

朝食もまた夕食同様にヘルシーになっている。そして朝食も女性陣からの評価は高い。

■宿場の夜、朝

世界遺産の「白川郷」の民宿で聞いた話だが、白川郷は昼間たくさんの観光客が訪れるが、夕暮れから朝まで観光客がいなくなり、数軒の民宿に泊まっている宿泊客と地元民だけになる。その静寂と生活感のある風情がとても良いという。

この大内宿も同様に、夜も朝も静寂に包まれており、昼間の雰囲気とは全く異なる。これが古い宿場の宿に泊まる贅沢と言うものだろう。



【大内宿の朝】

■塔のへつり

大内宿の近くに「塔のへつり」という奇岩の景勝地がある。

“へつり”とはこの地方の方言で、川に迫った険しい断崖を示すらしい。いくつもの大きな奇岩が約 200m にわたって並んでおり、屏風岩や烏帽子岩、護摩塔岩などの名前が付いている。

吊橋が掛かっている、その橋を渡ると岩の間に造られたお堂がある。おそらくここで修行をしていた僧がいたのだろう。

紅葉の名所ということだが、残念ながら少し来るのが早かったようだ。



【塔のへつり】

第四章 旅の記録

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひよい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって評価項目を 5 段階で評価し、委員会として評価値を算出する。ただし今回は私 1 人の意見で決定した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の 7 項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するようにした。

評価基準は 5 段階としてその定義は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

スパリゾートハワイアンズは、泉質 4、風呂 5、料理 3、コスパ 5、サービス 3、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.00 になった。コスパは無料送迎バスを評価した。

湧出温度は 58℃、pH 8.1、泉質は硫黄泉（含硫黄・ナトリウム・塩化物・硫酸塩泉）及び塩化物泉（ナトリウム・塩化物・硫酸塩泉）だった。特出すべきは湧出量で、毎分 3.5 t は一施設の使用量として国内最大だという。

高湯温泉「玉子湯」は、泉質 5、風呂 5、料理 4、コスパ 3、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 5、総合点 4.29 になった。

湧出温度は 48.6℃、pH 2.7、泉質は含硫黄-カルシウム・アルミニウム-硫酸塩温泉だった。

■旅の記録

実施は 2024 年 10 月 21（月）～25 日（金）の 4 泊 5 日の旅の行程を示す。

- ・ 1 日目 朝 9 時 40 分横浜駅に集合し、直行無料送迎バスでスパリゾートハワイアンズへ
昼食は SA で軽食、14 時 10 分チェックインして、入浴、夕食、フラダンスショー
- ・ 2 日目 11 時 20 分タクシーでオリックスレンタカーいわき十五町目店に行き、
レンタカーを借り出発、しかしリアゲートが開かないトラブル発生で店舗に戻り
修理し再出発、昼食は朝食の残りで済ませ、14 時交通事故目撃し対応、
東京電力廃炉資料館見学、17 時 30 分に高湯温泉「玉子湯」到着
- ・ 3 日目 9 時 30 分に宿を出発、雨の磐梯吾妻スカイラインを經由して、五色沼散策、
昼食を抜いて 14 時「グルもてコテージ Sengan」到着、猪苗代町に買い出し、
早めの夕食はお好み焼き、そして宿主から差し入れの松茸ご飯
- ・ 4 日目 9 時宿を出発、猪苗代湖の天神浜を見物、喜多方ラーメン「喜一」昼食、
会津若松の「飯森山」、「さざえ堂」見物、14 時「弥五島温泉 郷の湯」立寄り湯、
15 時大内宿「本家扇屋」到着、大内宿散策
- ・ 5 日目 9 時宿を出発、「塔のへつり」見物、10 時 30 分新白河駅前レンタカー返却
新幹線で東京へ戻り、東京駅で打ち上げ後、17 時に帰宅

1 人当たりの費用は総合計で約 78487 円、詳細を以下に示す。

- ・ 宿泊費 61153 円（1 人当たり）
ホテルハワイアンズ（2 食付 16600 円＋ショー見物代と夕食時の酒代 2283 円）
玉子湯（2 食付 24130 円＋夕食時の酒代 1157 円）
グルもてコテージ Sengan（素泊まり 6500 円）
本家扇屋（2 食付 9500 円＋夕食時の酒代 983 円）
- ・ 交通費 9777 円（1 人当たり費用、全体では 58662 円）
タクシー代（4900 円）
レンタカー1 台（4 日間 47740 円）
ガソリン代（5722 円 451km 走行）
高速道路（2530 円）
駐車場（300 円 塔のへつり）
- ・ 入場料 680 円（1 人当たり）
さざえ堂の入場料 300 円

- 弥五島温泉 郷の湯 380 円
- ・昼食 1877 円
 - 喜多方ラーメン喜一 700 円
 - 東京駅打ち上げ 1177 円
- ・持ち込みの酒代 約 5000 円 (1 人当たり、コテージの食事代含む)